
目覚まし

haruto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚まし

【Nコード】

N3398P

【作者名】

haruto

【あらすじ】

ある男の話。

雨で氾濫する川のように、人の心も簡単に崩壊していく。

そこで壊れたままにしておくのか、それとも意地で這い上がってくるのか。

それは人それぞれの次第であって、誰かが決めるものではないので

ある。

私（前書き）

初めて投稿します！

という訳で読み苦しかったり、意味不明な文章があるかも知れませんが、コメント等頂ければ勉強にもなりますので、是非宜しく願います。

私

私が朝起きる事が苦手である事は、大概の知り合いは知っている。それと同時に、私が適当な人間である事も皆知っている。

なので、普段私は私を私とは呼ばない。

逆に、私を私と呼ぶと、寒気…というよりすごく気味の悪い感じがするのであった。

一人称は「俺」であるし、勿論喋り方もこんな風では無い。

では、何故に今このタイミングで、皆様に挨拶をする瞬間において敬語なのかというと、私は今から死のうとしている。

人間の命の尊さは「計り知れないもの」とされているが、それは嘘である。

何故、人間が死んではいけないかの答えは「通夜やら葬式やら香典やら墓やらお金が沢山かかるし、その人が死んだ場合、周りの人間がとても仕事が大変になる」からだ。

私はそれを知ってしまった。

だから、これからこの箸から飛び降りて、残念な程にグロテスクな肉の塊となり。人生を終えるのだ。

人間の寿命など。天の神様や、閻魔大王が決めるのではない。人間ひとりひとりが、思い立った瞬間や、諦めた瞬間や、ミスをした瞬間に決まるのだ。

私はそれを知っているのだ。

止める者も居ない。

あと少し、ほんの少しだけ前に踏み出せば、私は事切れるであろう。

でも、その前に私は何故、こんな寒い12月の真冬日に死のうとしているのかを話していききたいと思う。

皆様にとって、個人的な話であるし、全く興味の無い話だと思うが、死にゆく者のメッセージとして、参考程度に見て頂ければ幸いだ。

俺

私、いや俺は、今まで真面目に生きてきた。

：しかし、先程も話した通り、人から見たら「適当」な人間である事は分かっていたし、俺自身もそういう部分に漬け込んで自由気儘に過ごしていた。

だがしかし、普通の人間として生きていた。

いじめられもせず、ドロップアウトするでもなく、何不自由無く小中高と学校での生活を満喫し、高校で知り合った友達とは卒業してからもう何年も経つというのに、今も連絡を取り合ったりしている。

そして、高校生活を終え、大学に入学し、他の学生同様、自分のしたい勉強など何処へやら、毎日パチンコ・麻雀をしては金をスリ、友人達と騒いでは反省し、恋に落ちては落胆していたりしていた。

大学卒業後は、大手メーカーの営業として就職した。

そこで社会人とは何たるかを学び、営業マンとしての知識や技術を勉強していき、3年後には立派なセールスマンになっていた。

俺はその会社で中小手のお客様に自社の機器を売り込むべく、毎日飛び込み営業や、顧客との接点作りに励んでいた。

社会人として6年が過ぎたある日、俺に最愛の人と呼べる人が出来た。

名前は「薫」^{かおる}、年齢は2つ下の可愛い女性。

年齢は年下でも、しっかりした所があり、時間やら部屋の片付けやら何でもかんでも適当な俺は付き合い始めて2週間後には完全にお母さんに怒られる子どもの様に立場が弱くなってしまいう時があった。

でも、そんな関係が嫌では無く、むしろ居心地が良かった。

薫としても、そんな年上なのにちよつと抜けている俺が気に入ってくれたらしく、付き合って1年後の冬、俺と薫は2人で暮らし始めた。

部屋は2人暮らしをするには狭く、1LDKの申し訳程度で風呂がついている部屋で、駅からもだいぶ遠かった。

だが、幸せな俺達には気にする事は何も無く、これからの未来に心を弾ませていた。

俺には女兄弟というモノも無く、母もとつくの昔に家に居なかった為、女性が毎日家にいるという暮らしは不思議でとても暖かい感じがした。

それが嬉しくて、俺は以前より仕事を頑張り、毎晩遅くなっても家でご飯を食べる様にしていた。

薫が作る味噌汁はとても美味しくて、とても優しくかった。

俺はそれが大好きで、毎晩馬鹿みたいにウマイウマイ！と平らげていた。

だが、同棲を始めて半年後の春。

俺は会社を辞めた。いや、実際には辞めさせられた。

早期退職という名のリストラである。

俺は会社と社会を一気に恨んだ。

そして、問題なく仕事をしている人間を恨んだ。

「すぐに次の仕事は見つかるよ！」薫は落ち込んでいた俺にそういつてくれた。

だが、現実はそのなりに甘くなく、不景気という向かい風も受けて、30を目前に控えた俺に、再就職先はなかなか見つからなかった。

そして、順風満帆だった同棲生活も、金銭面の理由と、心の余裕が無くなったのをキツカケに崩れ始める。

薫が段々と俺にプレッシャーをかけてきている気がして、俺は薫に酷く当たっては家を飛び出し、毎晩深夜まで酒を飲み続けた。

俺は多分生きてきた中で一番落ち込み、一番苛立っていた。
毎日フラフラしては、薫に当たり、泥酔し、人生について呆けていた。

薫もそんな俺に嫌気が差したのか、そんな生活が半年程続くと深夜に俺が帰ると家に居ない事が多かった。

俺はそんな薫が気になったものの、そこに釘を刺せばこの関係が崩れてしまうと予測し、敢えて聞かずに、俺達の会話は一気に減っていった。

そんなある日、一本の電話が入る。

病院からだった。

「薫さんが倒れました」

原因は過労。

俺の為に、俺と一緒にいる為に、薫は俺が深夜帰ってきた後も一人で仕事をしていた事を俺は医者に聞いて始めて知った。

その事実を知った日、薫が寝ていたのもあって、俺は薫の顔を見て、すぐに病室を出て、家で泣いた。

こんなに愛された記憶は今まで無かった。

たった一回の挫折で、俺は何をしていたんだろう。
そして、薫なんて事をしてしまったんだろう。

俺は、その後悔を胸に、翌日朝一番で久しぶりのスーツを羽織り、
薫の元に行き謝った。

今までの事、そして今回の事、俺がしてきた事を全て謝った。
薫はちよつと怒った振りをして、すぐに笑顔でスーツ姿の俺を足先
から顔まで見て「これから頑張ってこうね」と言ってくれた。

その後は、薫の言葉通り、とにかくガムシヤラに頑張った。
受けられるだけの面接を受け、飛び込みで仕事が貰えないか直接話
を試してみた。

最初はどこも駄目だった。

でも、その度に俺は薫を思い出し、それを活力に走り回った。

そして遂に俺は再就職を決めた。

再就職先は倉庫の運営管理の会社だった。

主な業務は電話番号や受注表とのにらめっこ。

今までの経験なんて殆ど役に立たない仕事だったが、薫と一緒に過
ごす為には、何の問題の無い会社だった。

仕事も段々と手についてきて、俺と薫の関係も元に戻り始めた頃、
あるニュースが天から降ってきた。

それは俺と薫の間に新しい命が芽生えたというニュースだった。

俺も薫も迷うこと無く結婚を決め、お互いの親に挨拶をしに行った。
薫の両親も、俺の親も、全く反対する事無く、俺達は晴れて夫婦に
なった。

俗にいう結婚式というものは行わず、家族と親戚と友人何名かを招待し、簡単なパーティーをし、参加者全員から祝福を貰い、俺は改めて薫という女性と一緒に歩んでいく人生に希望と期待を持った。

薫の腹がどんどんと大きくなり、出産を直前に控えた31の夏。

俺は毎日そわそわしてたまらなかった。

安定期に入っても体調が優れず、出産準備として早めの入院をした薫からの連絡が待ち遠しくもあり、同時にとても不安だった。

仕事はミスを連発し、反省しつつも残業はせず、会社からそのまま病院で薫を見守り、面会終了後は家で観もしないTVをかけ続け、ひたすら煙草を吹かし続けた。

会社内でも、その話は有名で、一部のおばさん連中には昼飯中に冷やかされたり、子育て講座をしてくれる上司もいた。

でも、そんな風に言ってくれる人達に囲まれていたおかげで、病院から連絡があつた際には仕事をほっぽり出して病院に行く事を認めてくれた。

生まれて初めて見た生命誕生の瞬間はとても凄かった。

元々、血やグロテスクなモノがダメな俺は手術室に入った瞬間の消毒液の匂いで倒れそうになったものの、薫の頑張ってる姿を見て、一緒に頑張ろうと必死に薫の呼吸法を真似ていた。

「オギヤーーーーー!!」

俺達の子どもが生まれた。

名前は「樹^{いつき}」

「3000gの大きな子です」と看護婦に渡されたが、そんな具体的な数字よりも、家族というとても大きな重さが俺の腕の中で寝息

を立てていた。

家族というモノは尊い。

俺個人の命なんか全然比較にならない程に尊い。

薫とは元々他人であるのに、樹がいる事によって、俺と薫と樹は家族になるのである。

そう考えると少し面白くて、とても大事に感じるのだった。

そして樹は少しづつどんどんと大きくなっていき、俺と薫はますます夫婦としてお互いを尊敬しあえる関係となっていた。

俺はその関係：つまり「家族」を壊したくない、俺の様な幼少期は過ごさせないと心に固く誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3398p/>

目覚まし

2010年12月10日21時29分発行